春雨文庫
第七號
下
開明小說
鄭振鐸編輯

A448
14

東京

和田定節著

○第廿七回

井戸端の會議長い鳶の嘘と川柳点の戯口ふー
て都會の町の裏長屋の情態を穿ち得さうと言ふべ
きなり然ばおの地ハ同ト京師ゟ在うなが繁華と
遖し片田舎梅の宮の町外れなどゝ猶呼々ゟ裏長屋
も有りけるゆゑ朝と夕辺い特さふゟ惣のち井戸の賑

48-7546

い〳〵水汲む釣瓶ハ櫚〳〵米炊手先ゝ夫なり
よ動う〳〵もせず諸色の相場や世間話〳〵實の入る
甲乙〳〵まさ米ガ騰貴さぎやア無ゝ此まア時候の
宜のよ何とつよ事ざらぬ〳〵オヤ〳〵天氣の
へで高く成さのぢやア無とサ長刕さゝの御人數と
一呼よお公家さゝガ大勢長門へ往てお仕舞なさる
と中山忠光さゝを大将よ〳〵松本謙三郎ざの藤本
鉄石ざのとつよ人ガ大和の五條で戦争を始めその

騒ぎガ齊と〳〵平野次郎とつよ人ガ但馬の生野で
戦争さハぎそまゝ漸く生そまゝ安心〳〵と思ふと
又ゝ何ざゝ長州ガ騒〳〵しいと言ふを夫ざゝ兵粮
よもるので米ガ高く成さのざゝさ何ごも知らない
こちと此方人らハ宜迷惑なものざ祢エ〳〵戦争とつよ者ハ
男と女と寐てもるのざと思つて居さゝ大違ひ切さ
ま張たりぢやア御免ざね工然ガまさ否な話〳〵ガ有
よ。ソレあの長刕さゝの家老の福原越後とつよ人

だの益田ぞの國司ぞのという人が戦争をしよ出かけて来ると言ふくふサ
甲「ホンニ其様な評だんを聞
乙「ア、夫丶正銘の話しぞツさ名な事
丙「世間が騒々しい上よ私きの家なんざア麩屋町のお店が封印成さので彼のお店の仕事
甲「だろう為て居さのぞかふ手明よ成り困り切て居るン
乙「ヨ、左様だらうぬく然が彼の本屋俵屋とやらの
丙「且那も矢ぞう三條さぬや長刀さぬと同ト様な鎖港
家とやふで守護職さまや所司代さぬよ憎まれ四條
の芝居前で捕まへられ
人数を手玉の様よ投出して大そう強かつさとねへ
夫ぞから迎ゆうと思へば迎られるのぞが態と捕まへさせてのぞツさ見て居る者の話しよ芝居の立廻
どころぢやア無く實よ見りので有さと言ふワ
彼のお店の旦那の清兵衛という人ハ軍學よ鬼一法
眼の菊ぞさけで黄石公とゆふよ被教授剣術の鞍馬

の僧正ガ谷で宮本義経とろうの先生より習つ

さのざッさ
乙「アノ夫ざろう
強ろうのざねへ
隣う裏の腕熊さんなんぞも喧嘩ガ好ざろう

其先生さちよと教授ろう宜ろう貰る氣づろひガ
甲「ソレ丙「然ガ其清兵衛という
無ツて
のお岩さんと言ふ方ガ又一ざん上手ざといふ評だんざヨ甲「オヤまア女の癖よ其様よ強いノ丙「なアよ
強いのぢやア無い心往ガサ乙「夫ぢやア程ガ能ツて
實ガ有のざ子丙「まア其様なものサ夫ぶから旦那ガ
居なくなり東寺の別荘へ引込こまう久しく成けれど旦那の慈母さんから旦那の妹と四ツみ成子と二

ツよある子を養ひ旦那が牢から出るのを待て居る
といふと実に感心なものざと私きの内の野呂助さ
んでさへ其お内室さんの呼び容子を見に往て来る
度に誉るのざア子（甲）真正に女ざと言て私き達が
その様な者だかりか無（乙）無（乙）私きの一
軒かして隣りの別嬪を何かに能出来て何様
な男でも捕ぐつけなのと言ふぢやア無ら（甲）オヤ彼の
江戸から来て居る御新造さぬざら囲女ざら訣らな
いと言ふ評だんの女ら工（乙）段々聞て見るに彼の別
嬪の新撰組ろのお頭の近藤とつふ人の御新造で江戸
から人を知れなの様に窓こ来て居るのざツさ夫さ
が何様しと事ら此間ふあり靴ぬぎの土間が広い物
ざから其中へ大きな土竈を築ろさせさが何を始
める積りざらう私き達ふやア些も解せなの（丙）ホン
ふ然（乙）焼芋屋といふ見ろいでな無（乙）然が何でも沢
山物を煮るのざらう若や鮒の混布きの御（乙）屋で

も始るのなふ麩屋町のお店で営業をお開きに成ま
でハ平な仕事ハ無かふ賣子よりて貰ひたいものざ
へ〳〵夫よりうまア不思儀ざ〳〵朝まのおん松魚節を掻やうな音が為るふ彼家の
下婢が使ひよ出さ時途中で逢さふお前の家でハ
聞が為透がなガリ〳〵ガリ〳〵松魚節を掻やう本音
を為るが彼ハ何ざへと聞さふ矢張松魚節をおく
のざと言さ子夫かふ其時入り口の土竈のふも聞
たう夫ハ何を煮る為ざうと知らあのが二三日前よ大
そう大きなお釜をお買よ成さ話しふ〳〵成ゝど
何ざう訣らない物へ〳〵近藤さうの人が水性でも仕
ふう捕へて釜滿ふ一掻てある松魚節て煮つけ天窓
かふ噛ツて仕まうとの積りざらうワ子へ〳〵左様
しふう一ケ所稲荷山かふ取て来て丸煮よりて様ゞ
所が出来るざらう物へ〳〵アハ〳〵ア〳〵夫ふ私き
も食さいワへ〳〵此せの様よ合戦の話しを聞さ女で

も氣が強く成て来るから男を煮て食ふなんな者が出来るぢらうヨ生で左ふ何様な女でも食ふかへ〳〵其うちまもお前あんざら大食ぢらうへヘンお前の左除て仕舞さふねへ〳〵オヤ驚ろい話しで思ひ出したが乙さんお前の所へ縫物や洗濯を持てお出の江戸から来ると見廻組の剣術の教授かだと言ふ渡辺さんの此節さのたり来ない様ざ彼是吉太郎さんう云彼人い彼様よう優しくつて女よしてゝも可愛らし

し成るぢらうと思ふ様な顔で居なぐら大層強いとねえ夫ぢらう程の宜いよ似合ぎ戦合が好なので頃と言ふ飛出る氣ざと見へて此間白い筒袍を洗濯よりつてお出の時重そうなものを肌着ふしてぢかう夫い何でスと聞ふ鎖帷子ざと言たら彼様な物を着こんで居る位ぢから特んで往ざと洗濯のさへ取りよもお出の間が無と見へて夫まけりの置ツさふしさ夫然りんぢから夫でお在

の呼へお届け申さうと言ふけれど夫ぢゃ家へ出掛てお出が無かゝ江戸や横濱の話しを聞さう又戯弄たりして遊ぶのが出来ないのみならず持て往て上ぜと宜と無理よ留て置さのぢアネ丙へアレまアお前なんぞの氣樂ぢヨ私きらくもちやア俵屋さんが彼様よおつさ

おゝ私きの家なんぞよ長く遊んで居るのぢアねへなまへ
前々何様ゝ仕やうと言ふ存心なのさうゝゝアレ左
様肯くの出雲の同屋で卸して呉なのぢヨ然がか
前も知つてお在の横町のお遊さんが旦那を欲しが
つて居るおゝ彼嬢なら大人しいので世話そしても
宜と思い渡辺さんよ其事を持掛ると自己ハ女の御
免ぢ少し優しいのでも言われると直よ熱くある性ぢ
かゝら往なり首つとけ吟ぐ髷ツ節も見えなくある雛
散つて仕舞のつお些立と投り出され起請も誓詞も
紙屑屋の正尼介と成て仕舞さのぐうら迚も出来祇
へ位へなふ色氣と食氣と断かくて仕舞ふと思ひ蛸
薬師さめへ願をかけ食氣一方と極さめよ食つくふ
なふ馬よ履せる草鞋でも白人捉祇の炭團でも手柄
で届ゝ親父の小言でもおこさんの臂剣突でも投う
きふひなゝく食よ積うぢなんのと胡麻かし請附ない
おゝ男が好くつて程が好くつて優しくゝつて切れ放

れゞ好くツて女の惚なゐ解がゐい女が惚まゞ手を
出さなゐ男ゐ十人よ一人も無いと言ふのよ彼辺さ
ん丰りゐお遊さん程る女ゞ旦那よ迷ツて居ると言
ても耳へ入れゟ剰軽さとやかり話ー少ーも相手よ
なゝるゐのサ夫ゞかゝ合宿なまのてお在の吉沢さ
んゞ縫のゟ特そよ来さ時聞て見さゝ横濱よ深ー
言ひ交ーさ女ゞ有て其寫真ゟ貪よ隠ー持て居るホ
ら或日酒よ酔て眠り込んゞ呼ゟ附こそ徐と出ーて
見て遣さゝ実よ彼の寫真の通りなゝ好女サと延ゟ
飲込こなゞゝお話ーゞツさワ夫ゞかゝ何程惚さツ
て無多なのサ憎いぢやアなゐい（甲）オや百里餘の
先よ一人ぐゝね情婦ゞ有のよ遠慮ゟして惚ゞ居
らゐる位なゞ真正よ惚さのぢやアなゐいお前も左様
ゞお遊さんよ取持て遣うとつゐのゞ真正の氣なゝ
だゝ実ゐ大指の目ゟ忍んで自分ゞ自分よ取りつて
貰ひさゐのぢやゝ外の者の惚なゐ縄張りよ字真な

んぞのよそお言ひのごとく釣瓶を摑うと放
腕の下を揉れば此方いと米かし捕をおき
よヨと飛除とたん毎日来つゞけの油屋が油捕と揉ぎ
油でも座い油お油い宣しう天秤棒のおとぶく
ギヒ〳〵

○第二十八回

愛よまゝ近藤勇の妻お美弥い勇と共よ京師よ登り
住居を梅の宮の傍うよ求めて竊うよ此処

も動の暇よい来う何よも睡まゞく語り合ひ楽しき
中よい有るりのよう世の中追く騒がしく成り社ば
勇の夫を鎮めんが為よ新よ募集されよる新撰組の
頭なる故寸時も心の休まる間をくお美弥もこれ況
助くるの才機あれば同ト思ひよ苦しきつゝ去年の八
月も長劾の人数堺町御門の守衛を免ぜられ七卿の
方く長人と共よ長門へ下向有りよる時既よ戦争よ
も成らんとその勢ひなりし故勇いお美弥よ落往先

んぞのことをお言ひのざらうト釣瓶を摑うて放
ー腋の下を擽れば此方い米かー捕をおきざ
よヲと飛除とたん毎日来つみの油屋が油桶を擔ぎ
ー油でも座い油お油い宜ーう天秤棒のおとぐ
ギヒー

○第二十八回

愛よまち近藤勇の妻お美弥い勇と共よ京師よ登り
住居を梅の宮の傍うよ求めて竊うよ此処よ居り

も動の暇よい来う何ゐ睦まじく語り合ひ楽しき
中よい有るものぬう世の中追く騒がしく成り社び
勇の夫を鎮めんが為よ新よ募集されうる新撰組の
頭なる故寸時も心の休まる間なくお美弥もこれ我
助くるの才機あれが同ト思ひよ苦しみつ去年の八
月も長刕の人数堺町御門の守衛を免ぜられ七卿の
方く長人と共よ長門へ下向有りうる時既よ戦争よ
も成らんうとの勢ひなりー故勇いお美弥よ落往先

阿美弥(おみや)が
しんりよ(ちょ)の深慮庭中
ゟ(より)土竈(どべつい)を
築(つく)

まで之を示し〳〵まど漸く〳〵よって無事よ済を其後大和
但馬常陸其他些〻の戦争い在りしかれども新撰組
い京師を護るの任なれば他へ出張をなさざるを以
て只都下の騒ぎしきを防ぎ居るのみなれば勇の
折々お美弥の許へ来りしよ此程よ成り久〻京師大
騒ぎとい成りたり其故い長刕の軍勢福原越後を大
将として進んで伏水よ陣し続いて益田右工門介も
兵を率ひ来り天王山よ陣し國司信濃も又兵を率ひ
来り天龍寺よ本営を構へうち因て近藤勇も隊下を
率ひ備へを固めて其変動を窺ひ居るの折柄がら
美弥の許へい断て音信をうりしかり然れどお美弥
い此前よ方一の事ありし時の進退い聞き置くる故
をもてせぞ只夫勇が戦場よ働くの助けをせんとて工
夫一居さりしが何思ひけん近辺よ居る左官を頼み
入口の土間廣らにをなすを以て側らの隅へ大いなる
土竈を築立させ十分よ火の燃る様よなし〳〵他の

家でも近在へ荷をそこび年寄子供などゐ其処へ迯
その彼処へ落そのとつの騒ぎを為れともお美弥い
夫らを目を掛ぜ下女のお鍋よ打むうい〳〵軍が始ま
ると言て世間でいそんな大騒ぎをするぶ吾侭の家
よの年よりの居ぎ子供のなし特よ此辺の場を名代
四方近所ぶ野びろいろふ何よも怖いるのさ
何方へ逃やうとお好そ次第ざァね夫ぶがら女の癖
よ悪く慾をかいくとお思ひざらうが彼様いふ時よ
物を買と世間で捨うりよ為るがらと思ひ大きいお
釜ぞの荷ひ桶ぞの御膳籠ぶのを買こゝい買込んざ
ぶ折角買こんでも其お釜を掛る物ぶ無ッちやア語
らをいろふ土竈を築立さやせさのざまア此様な大
きいお釜で何よ遣ッて宜らう旁く旦那ぶ御覧よ成
たろふ嘸お笑ひで有うと思ふヨ〳〵然けれども旦那さ
まの大きいとぶお好でお為居がらお嫌こびなさい
ませざらう夫して此竈でゐ煮るろお行

水のお湯でも沸きよい十分ぞ
まア夫よ急ても何ぞ急ぎ用立るぞ有りそうなもの。オヤ宜ぞ考へ出し〳〵此方でハ何様ぞる江戸ぶと夜少大きい火るぞ有ると其火る場のまわり〳〵夜鷹蕎麦うりぞの餡かけ温飩屋ぞのが沢山荷を仕込んで出て往き賣始めるのざヨ為ると火事〳〵出さ人ぞ腹ぞ空〳〵ても食ぶ物ぞ無いので困り食ぶの夜鷹蕎麦屋ざの餡かけ温飩屋へ来て食るぐ〳〵大層賣てお金ぞ儲けると言ふ話し夫ぞめ〳〵長州と申すの人が合戦ぞ初めぐ〳〵二人でお辨當ぞ拵へ賣ぐぢやアを いゝ幸ぐ其儲ぞお前と半分るみよして帯でもお揃ひよ買ふぢやアなのゝ〳〵アレ貴嬢ぐ〳〵て合戦の中でそんなるが出来まそめのゝ子氣樂なるぐり私ハ知らないめ〳〵左様思ふのざと言ぐ〳〵吾儕ハ知つて居る様ぐぶ本や何ぞゝ書てあるのぞ見ると軍ぐと言ぐ講釈師の話まねどを

い無のぢョ此京都い天子さゞ政事ゞ
取るお人の居ゞ所なので保元の軍平治の軍まゝ足
利の御代でい数限りも知れぬ程合戦が有ゝちゝ
も應仁の乱ゝ言て細川勝元とつゝ人ゝ山名宗全ゝ
つゝ人ゝの軍い西方ゝも都の中ゝ居て諸大名が二
分れゝなり何年も〳〵戦ツさつゞけれど京都の町
がなくありもせぬ夫が為ゝ其土地ゝ住で居るのも
が死でも仕舞いないのぢかゝ耳わど怖いものぢい
無らうと思ふョ然けれどもも御所の続うぢの関白さ
まも近所ぢのまゝ二条のお城守護職のお屋しき所
司代のお屋〳〵きの程近や國〳〵出海道まぢゝ押ル
て居るところい合戦場ゝ成らないとも言れぬ故大
膽ゝゞ言ていい居られないが此辺い街道まぢまゝ
そうの無辺鄙軍が始まつても鉄砲の音ゞ耳さゝり放
火の煙うゞ見て居るお内ゝ怖いてゝゝ些も無のぢか
ら其時辨當ゞ拵らくて賣ゝ軍ゝ追れ腹ゞ空ー逃て

来る人が多いので能賣れ火事場のまわりの夜鷹蕎
麦どころでい無いと思ふヨ然ゝ弁當屋を遣て見
やうぢやアないかお前より吾儕の方が沢山そふ
〳〵ヨ。オホ〳〵〳〵成ぞ昔しの軍のお話しをお耳中
へ入まし〳〵軍人どうし
が故なく殺されより家く
ませぬ様ぶる〳〵弁當屋を遊むして御覧な
さいな私しいお煮染の蒟蒻を煮つける役を成ませ

う鉄砲の音や何うぶ
忍ろ〳〵
つてブル〳〵
震へませ
うわゝ
美ざ〳〵然けれ
ど私
しぶつて

其場よ成ると矢張茹蒻の煮ると成るのぢらうと
思ふヨ〳〵今ツから看板を出して置なさいナ御幣
當軍をどまり次第賣出して仕舞と書て〳〵ゑんよ其位
な膽力ぢと屹度お金を儲けるけれど〳〵真正よ
笊當やを成さるのなら御煮染の種を早く買こんで
置ないと往まきまい先刻お遣ひよ出ると時荷物を車
よ積ざり擔いざりして田舎の方へ逃て參るものを
大層見かけまし〳〵ふ今よも始まるのか知れませ
ん〳〵然ぢやうまア精出して松魚節を掻てお呉よお
米ハ搗揚たのを幸ひ何俵も買込んざし醤油も買込
んだかよ沢山ある竹の波も上草履を造らせ一生あ
る程つんで置うと思ひ取りよせるとするかト言
ひかけ少し考え彼の月ケ瀬かよ来ると梅干の物置へ
入るツけうに〳〵ハイ彼い塵よ成らない大丈夫な
ところへ仕舞ますと〳〵夫でいトあの薪もまだ沢山
有ると〳〵三日四日ハ燃しつづけよ為ても無なり

い致しません然がアノ松魚節い此間ツから何本揃ま
しよう嵐入ふぎのお引出しも何も塞う誠よ入りの
よ困りまするふ夫より切鰯とう私しぶ煮方よな
り弱弱とういの様な物や些仕入れてお置なさいま
しな〳〵美も左様ぶが松魚節をかりい急よ揃ない物
だがふ入物が無れば箪笥の引出しを明て入るから
思いれ沢山揃てお呉かお前よも食させ吾済も食力を
出して働くかふサ〳〵江戸でいどうで御座いまもう

こち此方ちで賣お煮深い味淋と砂糖と醤油を入るとか
う松魚節い遣いないろと思ひまもワと言れてお美
弥い口隠りしが美左様耳て見ると江戸でも幕の内
のお煮深るどい味淋でおかり味を附て有ろと思ふ
ヨ然けれど此方で拵へる弁当い松魚節を思われ入
れ味淋をお廃しの新製と仕様ぢゆアないろ貴嬢
がお氣のお強いので私しまで強くなり合戦の初ま
るを待人の逃るよも構いもと握飯を拵へてお煮深

を煮ようりまる積りでいま座いまが怖さを耐いて
働くことが出来ませうり其時よ成て見なけまが自分
よも何ぞう分りませんワ〳〵オホ〳〵平まやア吾倩お
ぶツて耐へられるう耐へられないのサ然
おゝ餘まり怖く成ふ何も彼も投り出して逃て仕
舞うワ子〳〵オヤまア嫌しいまをなふ安心で座いまを
ヨ。オホ〳〵〳〵
お美弥がくの如き准備を做し何らの用よ達ちん
とまるうお梅と吉太郎の成往お岩が別荘よ困苦
まる等のるの猶編を次ぎおひ〳〵よ解分るを御
覧なうんとを祝希ふ

春雨文庫七編下之巻　終

明治十五年十月廿五日御届

編輯人　下谷區坂本町二丁目十四番地　和田定節

東京府士族

京橋區弥左エ門町十三番地　武田傳右衛門

東京書肆出板人

長野縣善光寺　小林屋　西澤喜太郎

發賣書肆

明治十七年二月二日

深哥延房編集
浪華史略　五編近刻出版
一名難波戰記

葛飾齋畫
花鳥山水漫画早引　初編一冊　二編近刻

彰義隊大野八郎遺稿
上野戰爭記　半紙本　全二冊
鮮齋永曜画

波多野英一先生著
小學用文墳字法　全一冊
霞峯片桐先生書

山々亭有人著
赤穗義士烈婦銘々傳　全一冊
盃齋芳虎画

松村春輔編輯
近世櫻田記聞　大本　全七冊
月岡芳年画

東京書肆　文永堂　彌左エ門町十三番地　武田傳右衛門

010190508337